

同時分布・確率変数の独立性・中心極限定理

樋口さぶろお

龍谷大学工学部数理情報学科

確率統計☆演習 I L09(2015-11-27 Fri)

最終更新: Time-stamp: "2015-11-27 Fri 09:57 JST hig"

今日の目標

- 2変数の確率変数の同時分布から、母期待値、周辺分布を求められる
- 独立性の意味を説明でき、独立かどうか判定できる
- 中心極限定理を説明できる



<http://hig3.net>

L08-Q1

Quiz 解答:標準正規分布の確率

標準正規分布の確率密度関数は偶関数 ($x = 0$ に関して対称) なので,

$$\begin{aligned} P(X < -2) &= \int_{-\infty}^{-2} f(x) \, dx = \int_{+2}^{+\infty} f(x) \, dx \\ &= P(X > +2) = Q(2.00) = 0.0228. \end{aligned}$$

L08-Q2

Quiz 解答:標準正規分布の確率

- ① $E[Z^2] = V[Z] + (E[Z])^2 = 1.$
- ② $1 - P(Z > 1.23) - P(Z > 0.56) = 1 - 0.1093 - 0.2877 = 0.6030.$

L08-Q3

Quiz 解答:正規分布の確率

① $Z = \frac{X-3}{2}$ とすると, Z は標準正規分布にしたがう.

$$P(Z \geq \frac{5-3}{2}) = Q(1.00) = 0.1587.$$

② $Z = \frac{X-3}{2}$ とすると, Z は標準正規分布にしたがう.

$$P(1 \leq X \leq 7) = P(-1 \leq Z \leq 2) = 1 - Q(2.00) - Q(1.00) = 0.8186.$$

L08-Q4

Quiz 解答:正規分布の確率

① $\int_{0.5}^{0.7} f(x) dx = F(0.7) - F(0.5) = (1 - F(0.7)) - (1 - F(0.5)) = Q(0.5) - Q(0.7) = 0.3085 - 0.2420 = 0.0665.$

② $z = \frac{Z}{2}$ とすると, Z は標準正規分布に従う.

$$P(0.5 \leq X \leq 0.7) = P(0.25 \leq Z \leq 0.35) = F(0.25) - F(0.35) = Q(0.35) - Q(0.25) = 0.4013 - 0.3632 = 0.0381.$$

③ $Z = \frac{X-3}{2}$ とすると, 標準正規分布に従う Z が

$$P(4.0 \leq X \leq 4.4) = P(0.5 \leq Z \leq 0.7) = (1. \text{と同様}) = 0.0665.$$

ここまで来たよ

3 正規分布・確率変数の変数変換

4 同時分布・確率変数の独立性・中心極限定理

- 2 変数の確率分布
- 独立同分布に従う確率変数の和
- 中心極限定理

2変数の離散型確率変数の同時分布

例で

6枚のカードから無作為に1枚のカードを引く.

♡7 ♡8 ♡9 ◇8 ♠9 ♣9

離散型確率変数の同時分布

$X = \text{数}$, $Y = 0(\text{赤札}), 1(\text{黒札})$ とすると (x, y) を得る確率 f_{xy}^{XY} は,

$$f_{xy}^{XY} = \begin{cases} \frac{1}{3} & ((x, y) = (8, 0)) \\ \frac{1}{6} & ((x, y) = (9, 0)) \\ \frac{1}{3} & ((x, y) = (9, 1)) \\ \frac{1}{6} & ((x, y) = (7, 0)) \\ 0 & (\text{他}) \end{cases}$$

2変数以上のとき同時分布 結合分布 joint distribution という
連続型確率変数のとき 2変数の確率密度関数 $f^{XY}(x, y)$.

表で書いた方がまし. ここでは, 「他」は省略.

$y \backslash x$	7	8	9	計
0	$\frac{1}{6}$	$\frac{1}{3}$	$\frac{1}{6}$	
1	0	0	$\frac{1}{3}$	
計				

離散型確率変数の周辺分布

同時分布 f_{xy}^{XY} に対して,

$$X \text{ の周辺分布 } f_x^X = \sum_y f_{xy}^{XY}, \quad Y \text{ の周辺分布 } f_y^Y = \sum_x f_{xy}^{XY}.$$

要するに

連続型確率変数の周辺分布

$$f^X(x) = \int_{-\infty}^{+\infty} f^{XY}(x, y) dy, \quad f^Y(y) = \int_{-\infty}^{+\infty} f^{XY}(x, y) dx$$

同時分布の母期待値

同時分布の母期待値

$$\text{離散型} \quad E[\phi(X, Y)] = \sum_{x=-\infty}^{+\infty} \sum_{y=-\infty}^{+\infty} f_{xy}^{XY} \cdot \phi(x, y)$$

$$\text{連続型} \quad E[\phi(X, Y)] = \int_{-\infty}^{+\infty} \int_{-\infty}^{+\infty} f^{XY}(x, y) \cdot \phi(x, y) dx dy$$

L09-Q1

Quiz(多次元の確率変数の期待値)

2変数の離散型確率変数 (X, Y) がある. 同時分布 f_{xy}^{XY} が下の表で与えられる.

$y \backslash x$	1	2	3
0	0	2/12	1/12
2	4/12	0	5/12

- ① 母期待値 $E[X + 2Y]$ を求めよう.
- ② 母期待値 $E[\mathbf{1}_{[Y \geq 1]}(X, Y)]$ を求めよう.
- ③ 周辺分布 f_x^X, f_y^Y を求めよう.

同時分布の母期待値の性質

$$\begin{aligned} E[\phi_1(X, Y) + \phi_2(X, Y)] &= E[\phi_1(X, Y)] + E[\phi_2(X, Y)] \\ \text{特に } E[X + Y] &= E[X] + E[Y] \end{aligned}$$

なぜなら,

$$\begin{aligned} E[X + Y] &= \sum_x \sum_y f_{xy}^{XY} \cdot (x + y) \\ &= \sum_x \sum_y f_{xy}^{XY} \cdot x + \sum_x \sum_y f_{xy}^{XY} \cdot y \\ &= E[X] + E[Y]. \end{aligned}$$

X だけ, Y だけの関数の母期待値

x だけ, y だけの関数の母期待値や分散は,

下の左辺= で計算しても

下の右辺= で計算しても
同じ.

$$E[\phi(X)] = \sum_x \sum_y f_{xy}^{XY} \cdot \phi(x) = \sum_x \phi(x) \sum_y f_{xy}^{XY} = \sum_x \phi(x) \cdot f_x^X$$

$$E[\phi(Y)] = \sum_x \sum_y f_{xy}^{XY} \cdot \phi(y) = \sum_y \phi(y) \sum_x f_{xy}^{XY} = \sum_y \phi(y) \cdot f_y^Y$$

母共分散 covariance

X, Y が離散型 (連続型) 確率変数で, $\mu_X = E[X], \mu_Y = E[Y]$ であるとき,

$$\text{母共分散 } C_{XY} = E[(X - \mu_X)(Y - \mu_Y)] = \cdots = E[XY] - E[X] \times E[Y].$$

さっきの問いで母共分散は?

独立性

確率変数 X, Y が同時分布 f_{xy}^{XY} を持つとする.

X, Y が独立とは,

$$f_{xy}^{XY} = f_x^X \times f_y^Y$$

が成立することをいう (世の中には, 同値な定義が多数).

独立とは, X, Y が互いに

独立性と共分散

X, Y が独立なとき, 母共分散 $C_{XY} = 0$.

すぐ後で証明.

母共分散 $C_{XY} = 0$ は, X, Y が独立であるための 条件.

L09-Q2

Quiz(離散型確率変数の独立性)

2次元の離散型確率変数 (X, Y) を考える. 同時分布 f_{xy}^{XY} は次の表で与えられる (現れない X, Y の確率は zero である).

$y \backslash x$	2	4
2	1/2	0
4	0	1/2

- ① X, Y は独立かどうか判定しよう.
- ② $E[X], E[Y], E[XY], E[X + Y], C_{XY}$ を求めよう.

X, Y が独立であるとき 'だけ' 成立する性質

$$E[\phi_1(X) \times \phi_2(Y)] = E[\phi_1(X)] \times E[\phi_2(Y)]$$

$$\text{特に } E[XY] = E[X] \times E[Y]$$

$$V[X + Y] = V[X] + V[Y]$$

$$E[XY] = \sum_x \sum_y f_{xy}^{XY} \cdot x \cdot y$$

$$= \sum_x \sum_y f_x^X \times f_y^Y \times x \times y$$

$$= \sum_x f_x^X \cdot x \times \sum_y f_y^Y \cdot y = E[X] \times E[Y]$$

$$\begin{aligned} V[X + Y] &= E[(X + Y)^2] - E[X + Y]^2 \\ &= E[X^2] + 2E[XY] + E[Y^2] - (E[X]^2 + 2E[X]E[Y] + E[Y]^2) \\ &= V[X] + V[Y] \end{aligned}$$

ここまで来たよ

3 正規分布・確率変数の変数変換

4 同時分布・確率変数の独立性・中心極限定理

- 2変数の確率分布
- 独立同分布に従う確率変数の和
- 中心極限定理

独立同分布の性質

独立同分布 (i.i.d.)

離散型/連続型確率変数 X_1, X_2, \dots, X_n が、たがいに独立で、すべて同じ確率分布に従う (同じ確率分布 f_x , 正規分布でなくてよい) とする。

これを X_1, \dots, X_n は**独立同分布に従う** (independent and identically-distributed) という。

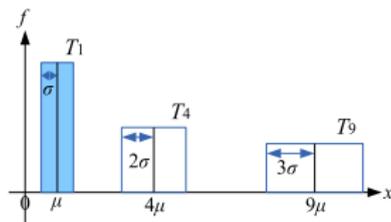
新しい確率変数: $T_n = X_1 + \dots + X_n$

母平均値 $E[X_i] = \mu$, 母分散 $V[X_i] = \sigma^2$ としたとき,

$$E[T_n] = \sum_{i=1}^n E[X_i] = n \times \mu.$$

$$V[T_n] = \sum_{i=1}^n V[X_i] = n \times \sigma^2.$$

T_n の確率密度関数はこんな感じ?



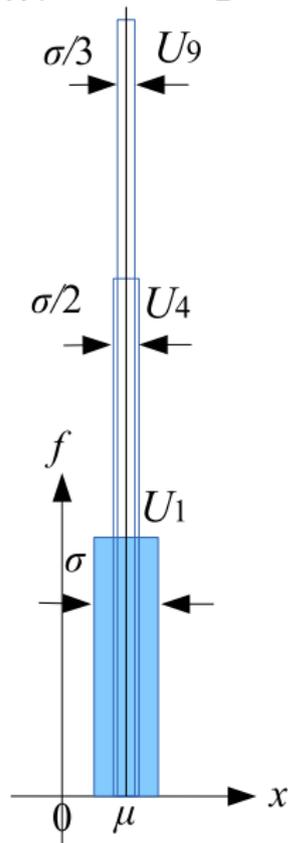
U_n の確率密度関数はこんな感じ?

新しい確率変数: $U_n = \frac{1}{n}T_n = \frac{1}{n}(X_1 + \cdots + X_n)$

$$E[U_n] = E\left[\frac{1}{n}T_n\right] = \frac{1}{n} \times n \times \mu.$$

$$V[U_n] = V\left[\frac{1}{n}T_n\right] = \left(\frac{1}{n}\right)^2 \times n \times \sigma^2.$$

大数の弱法則と話がある! 実際, これを使って大数の弱法則が証明できる



大数の(弱)法則

$U_n = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n X_i$ は母平均値 $\mu_X = E[X]$ に、「必ず近い」

正確には $\forall \epsilon > 0 \lim_{n \rightarrow +\infty} P(|U_n - \mu_X| \geq \epsilon) = 0$

(確率収束という)

証明 U_n に対するチェビシェフの不等式は、 $\mu_{U_n} = \mu, \sigma_{U_n}^2 = \sigma^2/n$ より、

$$P(|U_n - \mu_X| \geq a \times \frac{\sigma_X}{\sqrt{n}}) \leq \frac{1}{a^2}$$

$a = \frac{\epsilon}{\frac{\sigma_X}{\sqrt{n}}}$ とすると、 $n \rightarrow +\infty$ で

$$P(|U_n - \mu_X| \geq \epsilon) \leq \frac{\sigma_X^2}{\epsilon^2 n} \rightarrow 0$$

チェビシェフの不等式 Chebyshev's inequality

X : 離散型または連続型確率変数

$\mu_X = E[X]$: 母平均値

$\sigma_X^2 = V[X]$: 母分散

$a > 0$: 任意の正の実数

のとき次が成立する.

$$P(|X - \mu| \geq a\sigma) \leq \frac{1}{a^2}$$

ここまで来たよ

3 正規分布・確率変数の変数変換

4 同時分布・確率変数の独立性・中心極限定理

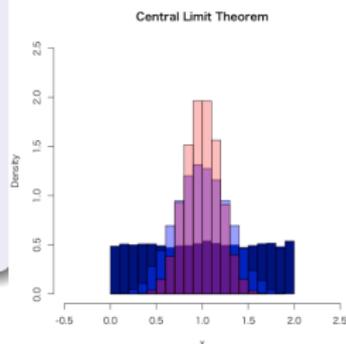
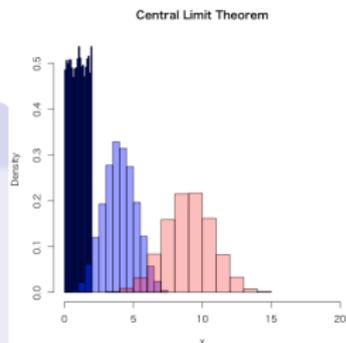
- 2変数の確率分布
- 独立同分布に従う確率変数の和
- 中心極限定理

実は $n \rightarrow \infty$ で f の形は長方形から崩れていく. 分布 $f(x)$ の個性が消える! っていうか美しい形に!

中心極限定理 (いいかげんバージョン)

X_1, \dots, X_n が母平均値 μ , 母分散 σ^2 の独立同分布に従うとき,

- $T_n = X_1 + \dots + X_n$ の確率分布は,
 に似る
- $U_n = \frac{1}{n}(X_1 + \dots + X_n)$ の確率分布は,
 に似る



中心極限定理 (厳密バージョン)

確率変数 X_1, X_2, \dots, X_n が、母平均値 μ , 母分散 σ^2 の独立同分布に従うとする。正規分布じゃない。どんな分布でも可

$$V_n = \frac{\frac{1}{n}(X_1 + \dots + X_n) - \mu}{\sigma} \times \sqrt{n} \text{ とすると,}$$

V_n は、 $n \rightarrow +\infty$ の極限で、 $N(0, 1^2)$ に従う。すなわち

$$\lim_{n \rightarrow +\infty} P(a \leq V_n < b) = \int_a^b \frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{-\frac{1}{2}x^2} dx$$

「 V_n は $N(0, 1^2)$ にしたがう Z に法則収束する」

法則収束とは、関数列がある関数に収束すること。

証明

$E[V_n] = 0, V[V_n] = 1$ はすぐわかるが…

モーメント母関数を使うと瞬殺

確率統計☆演習 II

L09-Q3

Quiz(中心極限定理)

確率変数 X_1, \dots, X_{10} は確率密度関数

$$f(x) = \begin{cases} \frac{1}{2} & (0 \leq x < 2) \\ 0 & (\text{他}) \end{cases}$$

の独立同分布に従う。ここで、 f から $E[X_i] = 1, V[X_i] = \frac{1}{3}$ と求められる。 $n = 10$ が大きいと思うと、次はそれぞれ、近似的にどのような分布に従うか、‘母平均値が , 母分散が の 分布’ のように答えよう。

- 1 確率変数 $T = X_1 + X_2 + X_3 + \dots + X_{10}$
- 2 確率変数 $U = \frac{1}{10}(X_1 + X_2 + X_3 + \dots + X_{10})$

連絡

- オフィスアワー月 4 木 6(1-502)



manaba 出席カード提出
<https://attend.ryukoku.ac.jp>